



新田
功隆

桂

石

壽

~ 13
3558
2



門 13
號 3558
卷 2



柱石傳初輯卷第二

第三回 太郎數馬說意中

顔子の家訓いよく上智ハ教之れ成下愚ハ教るといふ可益也と
あり中庸のハ教之れ其ハ知む也金言最宜ある内海太郎ハその
才氣頗る衆人ハ秀之れ彼金澤ある学校小室のし日より学問ハ其を
委ねり園方人ハ從ひて切ハ勉強するに不令多く才園て之を尋
常の弱官を固より一を笑之れ六十を曉るの宏才を其頭時よく是
を愛て嫡子三室丸が傍に估りて日夜ハ讀書をせりり回つて其
を射りて馬乗術又教之れ二ある者もあつて三室丸ハ此年十八より

柱石傳卷第二

早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 燐
藏 書

さるしむも時りなりの。さるは此春鎌倉の老はる。熙時が孫女を
三宅丸小嫁娶せんと両家の若らひ律大なる整ひは彼納入の佳
儀を齎し。鎌倉へ使節をて。誰をへ遣さん熙時ハ鎌倉小く股肱羽翼
の重臣を自ら。普代恩顧の武士どもも。その勇決を不通行の針
のく量れつてごまあり。邂逅金沢頭時が使節と多く往々との馬量骨
柄尋常の勝りて人におもむるが當家の恥辱不あるのま。老はる小女ら
る小老はるハ詞を揃へ。彼も弱きものこと。宰我子貢の弁を兼吉
今不通行のまを。筋骨飽きて運ま。萬夫不當の老はるある
まは。猿沢救馬小命せらるの外ハ。渠の彼地へはるを。若草小も。這般の老はる。不待ハ賢君あるものと争で。称讃せらる。

とりにまは頭時ハ。うちまは。さるは。吾も。然るを。必し。と。命を。召して。その。工を。せん。命を。小救馬ハ。忽地。領掌。と。名。後駕
の。準備。を。する。如。月。五日。ハ。良辰。多。う。そ。前。驅。後。従。を。差。去。り。整。鎌倉。へ
赴。た。る。ゆ。て。救馬ハ。熙時。が。館。人。伺。ひ。君。命。を。詳。し。演。て。贈。物。を。古。例
の。工。小。救馬。ハ。近。習。ホ。コ。工。を。披。露。不。お。ハ。熙時。満。悦。斜。る。は。程。多。く
救馬。を。召。し。て。る。救馬ハ。額。着。再。拜。と。く。熙時。小。謂。く。ま。は。豫。て。準備。や
ま。る。え。傍。の。紙。戸。あ。く。と。等。一。熙時。が。お。前。捧。つ。る。白。木。の。基。に。一。口
多。る。太。刀。を。載。し。り。此。と。は。熙時。命。と。ま。う。こ。ら。當。家。救。代。の。重。宝。兼。久。の
名。假。治。備。前。の。家。政。繁。齋。多。く。打。る。名。刀。這。回。の。佳。儀。の。婿。引。出。三
宝。丸。へ。奉。り。ま。る。嚴。ツ。て。その。む。ね。を。傳。へ。ら。ま。と。命。け。り。救馬。ハ。ま。ら。ハ

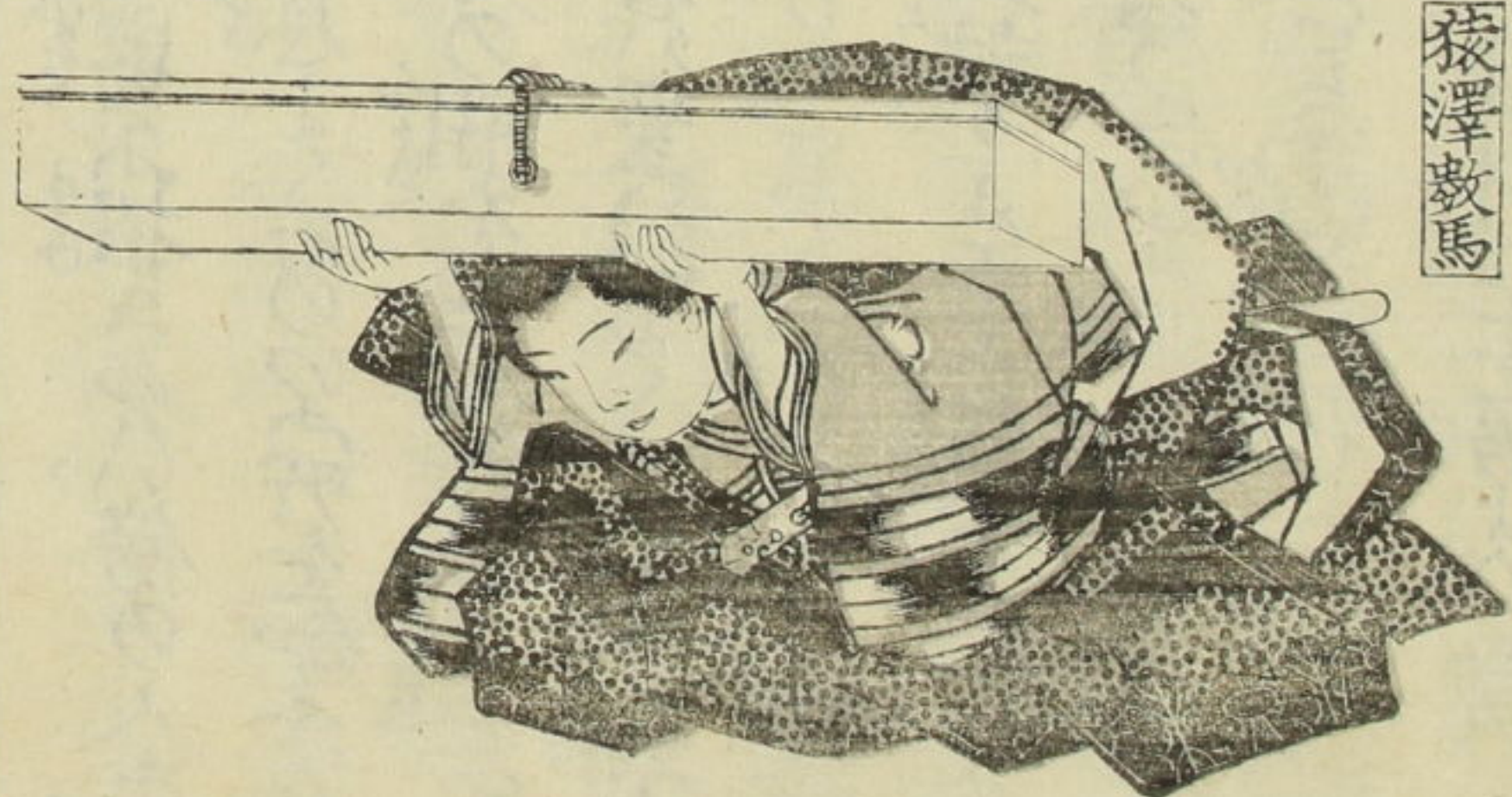
額着て命せ畏いひぬと云言稟して退先とほする所をいひては
自まこ一口の刀を平取ては汝が差料ふそらするを三宝丸小贈る太刀と
寸尺聊差ひる。さきども是は無名にて其作人を分らぬ。あつむは
焼又をうらよひの作事とせり。牧羊自ら御言と物に要小
立上り干將鏡も主にする。汝がては勇猛の武士ふわえおつ時小臨を
要小もする頭時主六支今の文才世小知もする程ありて家業むも
汝がてはを召するて是ふこそ千金も換がた至宝あることありけ
バ救馬も平取ては勿体なれば是よ其下と無知短才なるかやと
小称讚るしゆひては回答や小所はと心小十分の喜悦を催へ徐々と
あて退先より。跡めて是時近江小を集會て語りひのあり。這回使部小

参り方救馬と年々ハ仲々小器量勝早老る目と頭時餘り小寵愛
は目深まると其威小務まる氣あり。実小親戚の見愛ハ世小捨が死
老ふある。吾秘藏せる一刀を運小馬もその宝の孫女を嫁入り
和合あるをゆつめ人の救馬ハ婿の三宝丸小傳して寵はる。彼が
心をさらしえが後小必む災あるを察するが小あつむの汝もか
怪とともさ。さきども救馬ハ年々はあつむの悪事を悪出さる頭時と
の才子なれど彼が心をよもむと人を知ると難うとと吐きこつた近江小
いそ怪とみひはらえ。有煙小のと回答ふとと年々あつむ。あつむ
害公小死せんといふより更小解さる。あつむ前を退出するさきども
沢救馬ハ其目も暮小及ぶより。鎌倉小宿小宿り。その夜人々を驚

主二口傳二

日

命とろけ
あふく
少年珍更
をひき



猿澤敷馬



北條頭時

此一方多ぬ君息を荷ひ多うたわらりの悪行をなす様は救馬人の
 面もあつた多う牛馬にまじり心暖まらぬと回答て去て退歩小
 びる一間の裡へ頭時も然然として入る當下救馬はかゝる下り湯
 へ一歩知らむ伺公の席もやをめて感さる光景をよむは狂さる様
 志く心の裡へ刀をひきとりて明友の情も心を苦知らし自殺を勧
 撫小頭時主が不明あを世子のて知さぬやうひきさる様を知ら
 せんとて遂電をさへせざるがふ一刀にうち捨く渠と吾が争論小
 及社多しと心を定め次第一間の斤量救馬を招き内海太郎は書を低
 息を吞律合さる卒尔に似て目と心を止し死事ある心を決てよく
 寝れよ唯今君のせ前めて是般その山徒あり勿論入る漏るそと

命いあまで朋友の情をりて足下にきくかこの下りの悪行ハ卑賤の
 老いも心を差況て足下ハ君の寵にその罪萬死小當るものあり
 るが罪を知りて今宵のうち自殺せらるる様を免くはあん
 りあまびきく遅るるまじ御必らと様器は被らむ昔の苦痛を恥を
 曝さへ今宵生害をさへと某事小借きて死を武士の法はしてん
 奈何あまくと白眼のまじり得の救馬此をよ面色土のてこりて口
 隠りしが心地小呵々々ち笑入る太郎刀柄狂氣せらる俾れ物小襲
 び下り廉直ある某を賊入るその悪言は彼彼ありがうたどる主
 君の口徒ありとも尾箆の箒言はけとと扇を怒らし肘をもち眼を
 睜ま内海太郎も膝立直ると冷笑入口こそ横裂れらる空をやく

をひかりと口を尖し肘を張て片岡主の命をさぐり。為小聊もぢぢるけしむ。諭
 鹽中口もゆも。あつと何をい言え。や君の心違ありとも内海が過言
 故ごうと眼を睜と六太郎のちも其足下は雙もるく怒もるんとい
 中して喪りと巧むと今いふも武士の情をもとを斯いふれを獨れも
 ぬれを友よ交ぬは信成りてまといのを何さるひる人を欺く天欺く
 人の欺くあつとと賢さく人の言の輩の平生も足下が譯さる必争それる
 余所中して無道よ力を添もるを嗟薄情やとるるまの兵衛の面も青く
 るの赤くあつと坐然とて続て救馬もあつと初んとまも引とせむ。
 太郎がも首途をりあり。極むるも動也と。乱れ入る近習の面も残
 忍無頼の稜沢救馬縛りひる徒をて声の下より引倒し折をるると千筋の

素小高の小子を縛りし。囚獄へての繋ぎの目

第四回 重義太郎去学校

切て次の日稜沢救馬を決断所へ曳出せば官人木列を平く頭時自ら
 中央にゆく声もあつと宣さる。あつと救馬奉るも你ハ徳用よるも
 傍に扈従するや殊さく子のてく小あつと。過分の慈愛をさる所。
 忽地恩を亡却して選時幸り贈らまら。太刀を偷じ大罪人を臨小
 るさむと飽足と宣言を救馬ハ頭をち仰ぎこも徒も学術も
 何方の者も上聞の建せらる。その弁と父も其過分の標
 を賜り衣食器財小律を歎むを不足に千金の身を顧むと偷をる

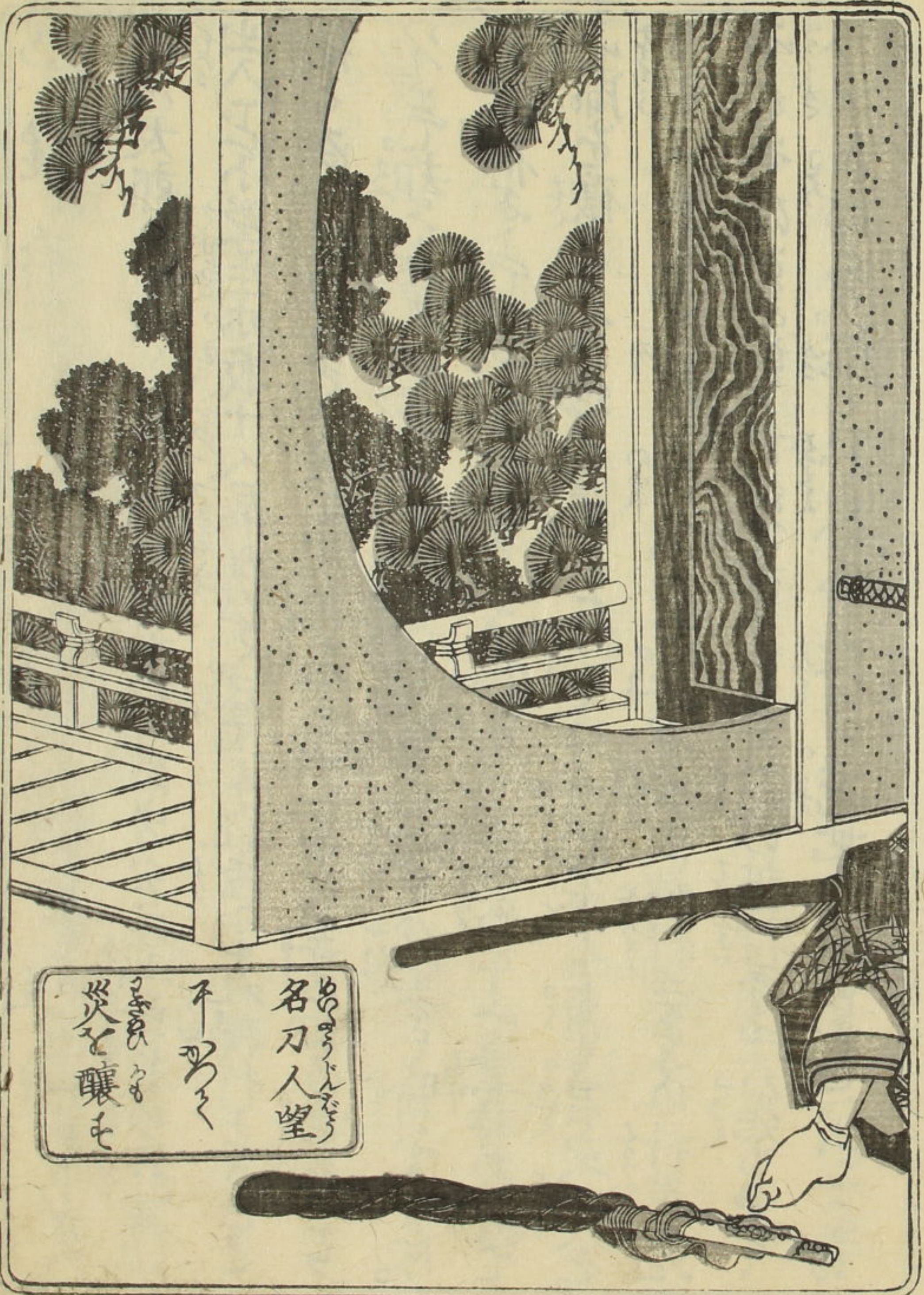
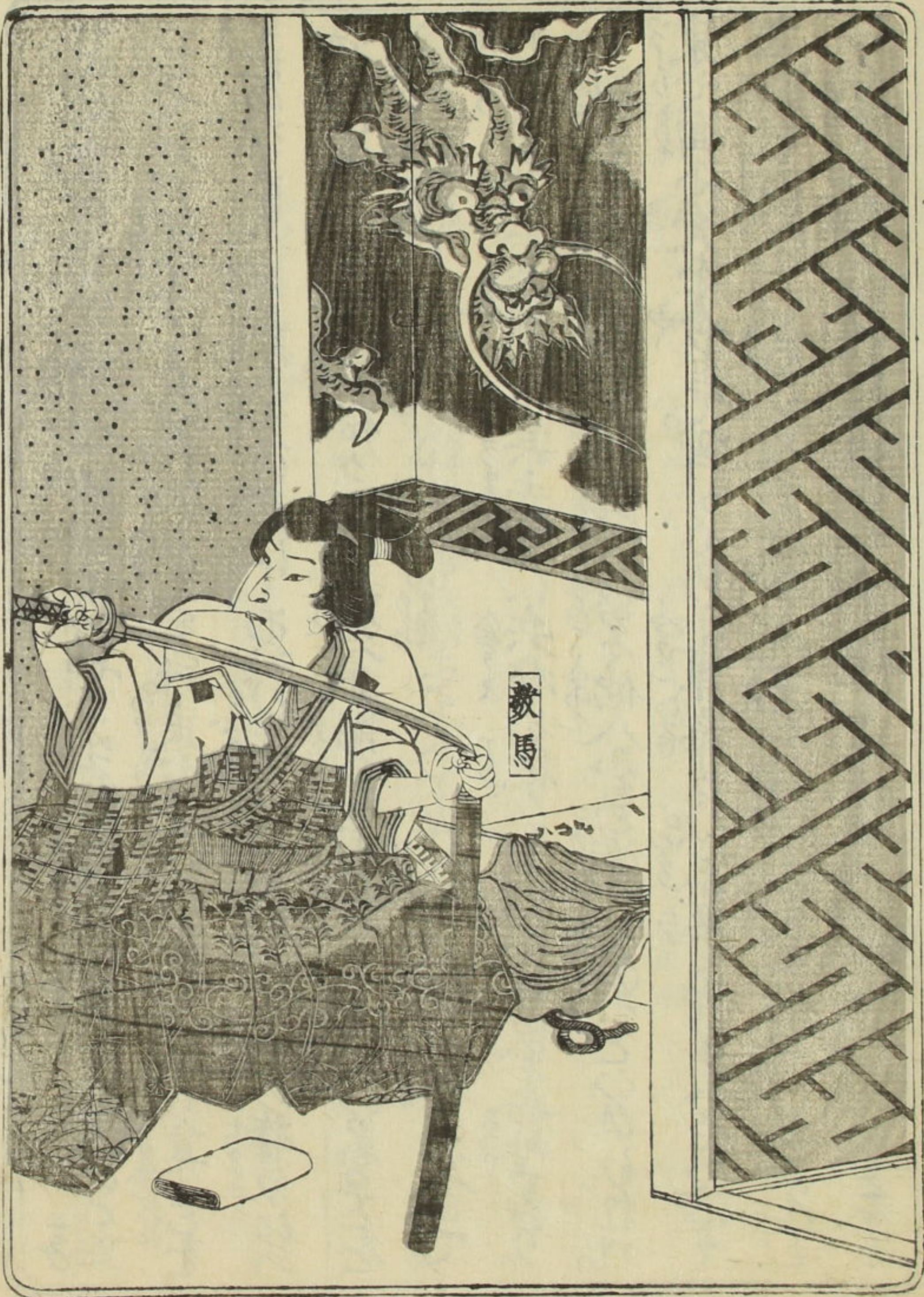
おだたか。学校寄宿して。師分の園多。足下、譜代見願の家
 隸救馬。不た。三空屋。傳少。出。足下。後。栄。え
 と。疑。唯。核。救。馬。吾。の。所。從。以。獄。卒。の。由
 に。野。外。に。曝。く。是。の。事。が。遺。恨。多。く。足。下。の。心。を。一。回
 知。せ。と。陳。し。る。命。を。捐。て。も。知。ず。と。無。道。下。替。力。を。添。ゆ。意
 多。く。誣。罪。を。知。る。俱。不。速。の。信。を。の。文。を。朋。友。の。道。と。い。ふ。に
 免。て。も。道。を。不。承。命。自。ら。反。に。觸。て。を。其。罪。を。知。る。所。為。あり。と。
 某。を。速。り。う。足。下。の。渠。が。取。辱。を。其。過。去。は。つ。て。な。ら。ず。も。善
 業。を。受。入。む。と。う。ち。譚。今。さら。に。兵。衛。の。口。を。唯。ま。り。不。承。命。の。事
 回。答。で。罪。を。重。く。居。り。う。が。是。下。り。て。内。海。太。郎。を。吾。眼。上。の。癩。多。し。と。

扶。く。は。む。ひ。を。り。太。郎。の。兵。衛。の。薄。情。さ。ふ。心。の。裡。に。速。を。墨。て。釈
 へ。文。ら。な。ど。か。て。月。日。を。送。る。に。此。年。秋。の。季。と。う。頭。時。父。が。以。前
 に。夢。ら。も。太。郎。を。太。く。愛。す。餘。り。父。子。俱。々。皆。ら。ひ。く。或。時。太。郎。を。召。れ
 づ。俸。わ。さ。し。不。似。自。も。家。隸。を。り。学。校。入。寄。宿。さ。る。人。多。か。ら。に。
 汝。が。正。死。宏。才。中。將。文。武。は。通。ず。る。の。の。色。さ。宜。は。ひ。く。惜。む。不。後。を。せ
 汝。が。智。量。を。の。し。も。吾。が。正。死。の。山。身。有。る。且。不。肖。多。夫。人。を。不。足。多。り
 身。も。あ。ら。ま。と。寄。宿。あ。り。う。始。め。よ。師。分。の。園。に。及。を。三。空
 丸。結。苦。の。愛。老。も。此。年。来。の。報。恩。を。せ。ぬ。と。吾。家。隸。と。る。り
 て。や。さ。ら。ば。汝。が。望。不。件。く。禄。を。も。た。え。唐。所。の。地。を。も。其。え。る。と。お。わ。り
 是。日。六。太。郎。六。俊。巡。て。礼。を。平。身。不。肖。多。其。を。以。家。隸。不。召。也。

此身に於て出たるは傲倅父もさきそふ徳へ入去るる此度一たふ
父不告志して後小四言稟仕して一帝の御前頭時をそ受るる人
さしこそお見事こそお見事父弥後吾も昔時ハさき武士の果と安
吾々下たの由身に給事ハ望むまじむれと妻年の好まをのく強ふ
兼て望み。吾望に志せよ太郎といと懇ろ命にまう。太郎はまうとく
頓首してさき近なる故なる父の家居に訪りておれた重た命日を
いひ安さる雀躍しく歡ひ多し僅の暇を給めとやにさき易たうそ
出さるといふこと。故々人徳をいふこと。又ハ這面ハ善き殊に人へ
まじし後ハお見事一さき急ぐにまじしと命お見事思を請
その席をえ退出する。斥固兵衛ハ少くも知らむ。次の間は伺公一と。

四前へ先キ一さし何中ら低語るるにさき端多ハさき後
傍に耳にさき答をまじし如きさき。便わくと太郎より。さき不退也
独情もよに太郎ハ才智といひ文武の道も吾々の願う。渠今まハ学校
ふくた。学校のことをも。司さき。さき。家内の列承。如ら。君
の寵愛他日ハ倍一出野とさき。さき。吾威勢。如地。不度
多し此禍をさき。さき。後必ら。胸を唾の悔わ。さき。その入
太郎。己の身。の才智。さき。吾を。さき。平生。に心憎く。渠に。さき
多し恥辱を。さき。自ら。の身。を。さき。と。豫て。さき。の。計。策。を。思。ひ
巡ら。せ。と。容易。く。さき。計。り。入。り。て。目。を。経。ぬ。さき。這。面。の。お。見。事。今。ハ。さき。世。の
於。豫。も。さき。と。胸。を。痛。め。替。り。さき。夫。より。日。夜。之。夫。を。恨。み。寝。食

柱石傳卷二



あまのりや
名刀人望
不
災を醸毛

色を奪て同胞中も足下が深志其外とせしを忘る。其
 おと太郎の知らず。武道もいと聞え。その上學校の教
 出入下ふ學生亦教十人属從ひて辱められ後ふれ獨行さるること
 絶くは。さうば多く人志を討思えとせぬも奇と。その禍を
 へし却て此等の害とある。叢を獲て蛇を逐せと諭ふ。其
 子々奈何不して討たんと密にわかれ東七が黙然として要時ありて
 小藤を破とうち。渠と足下との交り内心免れ角も君父二人を
 同胞に。幸ていま欲と宣ふと。彼を驚き獨行さるるの計策
 中もわび。さうばも容易く。苦肉の謀計も。渠も多く
 吟削和郎あり。深く思慮して浮き死地ありといふをき。

兵衛も俱不慮してその計策のありと。其つらう百切平磨の
 患苦をみるも帯せえに難きを。その計策を。あり。多く
 額を突せと耳より東七の息を。その計に。這般。ま。如。此。に
 討らひ。渠。つ。で。え。過。え。吾。の。路。不。隠。且。居。て。刀。の。積。と。さ。こ
 ん。の。ま。あ。じ。と。面。の。皮。を。利。海。へ。の。て。う。ち。あ。ん。さ。う。ね。が。雅。所。為。も
 知。ま。ど。こ。の。増。え。計。の。あ。ら。と。低。語。バ。兵。衛。ハ。頻。り。ふ。う。ち
 点。頭。て。あ。ら。の。く。此。上。六。萬。に。一。も。仕。指。手。ま。じ。と。計。ら。ん。と。は。先
 東。七。様。の。声。を。低。ち。て。そ。道。不。志。あ。る。の。の。の。道。を。り。て。懸。く。べ。し。
 必。ら。と。足。下。経。卒。中。々。野。心。も。気。ぢ。ら。ま。ら。ば。律。仕。損。む。の。ま。ら
 で。後。の。患。を。曳。出。ま。す。心。を。用。ひ。て。信。ふ。小。敷。と。多。と。説。あ。り

廿六兵衛は多く東七が言葉を信じてその才智の園を頻りに讃讃
 葛武侯の智慮并第も足下に今も増え口管持を奉らざること
 ぞを笑へく。却て太郎の頭時夫が報恩演不詞を父弥
 藤吾も平生より吾をさるべき志度の口内ありてそのとおを
 らして。這回のエを物ごらば悦びの一日も早く起行せんのをと
 後の準備小目を送り律大形小敷ひるまひて六近言小出さんと
 此夜は独子舎小居て何事と多く集む。折やら人の足音も
 太郎主存と云い言平く兵衛多。太郎の心地中を率ていなる頻
 のエありて。自ら訪せぬらまづくもと障子を困けは兵衛
 髪を乱し。自後をとり折巻す。押當に身を堅り平生より六

ころした腰刀を帯り。大息吐と挫とせき。太郎は大小訝りて。こを置
 置しく異さある。足下が打おひひむいなる所相を頓々と負ち守り向
 少目兵衛ハ勿心地被。然に救面大息吐其その身を慎く夜小も人
 を漫らたさるるに水凍束七。今日老臣の評席中口管小口を
 福し。その上不法の両口雑言を多く腹小居れ。言其の中を去せたりち
 損と。必ひ小口と一朝の怒り小の身を喪ふ忠と孝の道は差や
 次又小胸を磨り。その席を果し。言と凍やこつる暴康小や
 今日方へ書翰を送り披てくれ。斯の工の文面逸その意を
 びされども。所相果し状あり。其さう望すねども。是をひて往さる。ハ
 里怯ありと。於嘲り。まこと往さる。身を喪ふ。是斯せん。沈吟す。まこと

を。足下一個の心小飲り。園のあま太郎。主渠を嚮り。嚮り。吾
を俟て。久し。か。ん。去。遅。る。ま。び。奮。震。して。来。れ。も。量。れ。か。ん。だ。さ。し。ま。ば
大。意。此。如。小。見。ま。す。足。下。が。好。意。も。水。の。泡。と。思。ひ。と。違。う。ら。太。郎。も
さ。と。て。衣。服。を。改。め。学。生。中。か。知。る。な。り。吾。小。從。ひ。来。る。律。儀。便。よ。る。ら
ふ。あ。じ。と。耐。近。あ。る。も。提。灯。を。提。て。頓。と。ま。歩。程。遠。く。ぬ。赤。沼。と。称
す。耕。地。の。嚮。来。る。路。狭。く。して。左。右。より。松。栢。弥。ぎ。り。小。重。る。傍。の。清
水。清。く。と。音。も。烈。き。流。る。り。此。を。た。水。東。七。侍。務。て。期。す。る。れ。ば
身。許。に。打。拍。て。今。之。と。樹。之。の。間。小。白。き。牛。一。太。郎。が。多。く。を。俟。所。小
兵。衛。の。其。く。仕。課。と。て。手。提。灯。を。照。し。り。物。が。あ。り。て。左。右。を。さ。し。の。来
る。る。ら。ぶ。東。七。侍。を。潜。り。て。中。段。小。刀。を。奪。入。つ。の。ま。と。太。郎。の。後。上

目。か。り。た。一。お。と。双。の。拳。の。脊。力。を。究。り。て。微。塵。も。な。ら。ず。と。破。法。を。足
音。き。ら。の。身。を。か。り。て。兵。衛。も。力。を。さ。し。り。と。引。け。前。後。より。一。ま。た。も
あ。り。村。と。さ。る。を。所。海。太。郎。の。野。務。の。二。気。色。も。あ。る。左。右。より。見。え。り
又。を。潜。り。傍。の。株。も。あ。り。て。甲。佐。の。水。東。七。侍。基。小。佐。の。仔
細。あ。り。て。も。欺。害。さ。し。と。嗟。卒。尔。り。片。岡。兵。衛。吾。小。又。び。意。を
か。し。ま。と。言。せ。も。敢。て。呵。々。と。笑。ひ。仔。細。く。て。も。人。を。害。さ。し。物。畏。い。ま。と
誅。不。伏。せ。し。い。も。思。ね。に。双。方。より。太。刀。予。揚。ぐ。破。れ。と。は。ま。ま。の。死
姑。り。て。兵。衛。が。あ。り。欺。害。目。了。を。洗。り。し。辭。入。と。ま。ま。と。所。を。身。の。火
と。當。悟。して。腰。の。刀。を。抜。き。も。存。在。切。先。兵。衛。が。鼻。の。ま。と。さ。し。つ。の。ま
自。眼。の。目。が。兵。衛。の。後。巡。り。中。段。小。刀。を。奪。入。つ。の。ま。と。太。郎。の。後。上



どの計らひも、とて三室丸うちよ、太郎を密ふらむ。太
 郎、既小字を悟ま、ありし、三室丸が召に、とて、詮方なく、衣腹をば
 前へ出さ、近く招き、眉を頻り、全く、汝が罪ある、の、吾の意を
 察し、望にも、あま、此の、露頭ある、とて、知らむ、と陣せよ、これ、父
 君へ、上給ふ、中て、汝が罪を宥めん、渠あが、た、不可惜き、身を、喪ふ、ハ
 歎く、よ、絶し、う、曲し、吾意、不従、と、い、あ、つ、た、三室丸が、肝、肝、腹、腹、
 泣、感涙、袖を、浸、と、い、す、太郎、の、目、を、兼、ひ、と、は、家、は、西、個、を、
 に、被、言、ふ、ので、此、の、安、泰、も、さ、き、法、の、と、く、に、行、ひ、の、大、罪、人、あ、つ
 某、を、憐、れ、ま、つ、た、三、室、丸、の、尊、厳、の、身、の、難、と、あ、る、一、君、命、背、く、べ、た
 む、あ、ら、ね、ど、此、の、さ、き、話、ひ、が、つ、詳、し、め、と、い、ひ、に、よ、つ、て、三、室、丸、は、あ、つ

た、び、三、室、丸、の、吾、意、不、任、す、と、い、つ、と、問、答、時、を、殺、し、所、不、頭、時、幸、り
 使、り、て、老、信、西、個、先、に、さ、つ、畏、兵、を、召、く、三、室、丸、が、館、来、り、内、海、太、郎
 に、尋、ね、訪、ね、赴、な、あ、り、召、連、し、多、の、内、徒、あ、り、故、不、召、俱、し、と、い、ひ、に
 三、室、丸、會、釈、あ、り、太、郎、は、さ、き、さ、る、吾、召、俱、し、て、決、断、所、へ、参、り、父、君
 に、さ、つ、け、し、と、老、信、某、を、返、さ、れ、と、い、ふ、太、郎、不、御、の、と、い、ふ、と、命
 甘、め、太、郎、不、春、法、を、副、言、と、決、断、所、へ、参、り、と、言、頭、時、も、さ、き、の、太
 郎、を、初、め、命、ま、さ、る、今、宵、赤、沼、燈、不、お、た、く、水、邊、東、七、丘、園、兵、衛、及、に
 かり、果、居、る、茶、丹、の、老、の、お、ま、り、身、を、亂、し、素、じ、ふ、汝、も、ん、の、
 風、儀、あ、り、冬、り、汝、が、子、會、の、裡、を、改、め、し、む、に、怪、し、る、汝、が、不、血、を、流
 せ、と、い、ひ、身、に、差、さ、さ、る、と、い、ふ、故、の、く、渠、等、を、殺、せ、し、包、す、首、實、を

甘とあると死に三室丸八進の[○]某[○]此[○]頃[○]羨[○]る。太郎を召て尋問に
 今[○]渠[○]ハ[○]知[○]る[○]と[○]死[○]に[○]候[○]人[○]ハ[○]渠[○]を[○]憎[○]む[○]と[○]君[○]ハ[○]言[○]上[○]を[○]尋[○]ね[○]り[○]と
 宣[○]は[○]れ[○]頭[○]時[○]が[○]さ[○]も[○]あ[○]り[○]な[○]べ[○]と[○]去[○]あ[○]る。太郎が不[○]承[○]の[○]深[○]ハ[○]最[○]怪
 一[○]切[○]所[○]多[○]り。太郎よ[○]い[○]ふ[○]其[○]工[○]を[○]知[○]ら[○]ざ[○]ら[○]。母[○]ハ[○]回[○]答[○]せ[○]り。三室丸が詞の
 工[○]多[○]し。奈何[○]と[○]問[○]ふ。太郎ハ[○]頭[○]時[○]を[○]ち[○]擧[○]ぐ[○]夫[○]ハ[○]余[○]ノ[○]某[○]君[○]の[○]某[○]を
 救[○]へ[○]と[○]斯[○]の[○]工[○]に[○]命[○]を[○]さ[○]す[○]東[○]七[○]兵[○]衛[○]を[○]さ[○]す[○]不[○]被[○]ハ[○]某[○]が[○]野[○]為
 小[○]く[○]始[○]め[○]ハ[○]遠[○]服[○]後[○]ハ[○]如[○]此[○]ノ[○]努[○]勞[○]傷[○]ム[○]と[○]在[○]ら[○]ず[○]ま[○]を[○]や[○]は[○]え[○]頭
 時[○]を[○]さ[○]す[○]余[○]ハ[○]余[○]ノ[○]空[○]言[○]あ[○]ら[○]ば[○]汝[○]ガ[○]罪[○]と[○]の[○]い[○]ひ[○]が[○]。察[○]す[○]る
 兵[○]衛[○]東[○]七[○]汝[○]ガ[○]才[○]智[○]を[○]妬[○]む[○]の[○]事[○]。奪[○]ふ[○]と[○]甘[○]の[○]あ[○]ら[○]ま[○]ら[○]ば
 罪[○]ハ[○]渠[○]ホ[○]ア[○]り[○]て[○]汝[○]ガ[○]罪[○]に[○]あ[○]ら[○]ね[○]ば[○]。予[○]ハ[○]渠[○]ヲ[○]推[○]て[○]察[○]す[○]る[○]の[○]事[○]。今[○]ト[○]ハ

八[○]室[○]を[○]洪[○]く[○]や[○]。渠[○]々[○]評[○]儀[○]を[○]さ[○]え[○]と[○]い[○]ふ。太郎を召[○]て[○]三室丸ハ
 預[○]ら[○]れ[○]頭[○]時[○]お[○]へ[○]入[○]ら[○]す。名[○]籍[○]の[○]項[○]あ[○]ら[○]る。三室丸ハ太郎を俱[○]
 籠[○]へ[○]退[○]た[○]回[○]ら[○]る[○]喜[○]聊[○]の[○]好[○]意[○]を[○]。汝[○]ガ[○]罪[○]を[○]宥[○]へ[○]と[○]汝[○]ハ[○]い[○]ふ[○]と[○]言[○]は[○]す
 吾[○]詞[○]に[○]従[○]ふ[○]と[○]在[○]の[○]隨[○]ふ[○]と[○]甘[○]と[○]命[○]に[○]太郎[○]ハ[○]涙[○]を[○]お[○]さ[○]君[○]の[○]語[○]息
 詞[○]の[○]謝[○]し[○]奉[○]つ[○]と[○]甘[○]も[○]あ[○]ら[○]ん[○]心[○]に[○]甘[○]け[○]と[○]曩[○]に[○]汝[○]馬[○]罪[○]を[○]お[○]
 して[○]亂[○]明[○]さ[○]る[○]前[○]の[○]い[○]ふ[○]人[○]を[○]奪[○]ぐ[○]と[○]甘[○]と[○]某[○]渠[○]の[○]理[○]を[○]い[○]ふ[○]責[○]す[○]。
 その[○]兵[○]衛[○]が[○]心[○]に[○]い[○]ふ[○]詞[○]を[○]後[○]に[○]い[○]ふ[○]と[○]あり[○]渠[○]ホ[○]今[○]も[○]死[○]す[○]と[○]夫[○]
 某[○]の[○]言[○]を[○]食[○]む[○]を[○]通[○]く[○]道[○]を[○]索[○]め[○]ん[○]君[○]の[○]命[○]を[○]さ[○]す[○]と[○]い[○]ふ
 渠[○]ハ[○]渠[○]ホ[○]を[○]い[○]ふ[○]差[○]違[○]ひ[○]の[○]事[○]と[○]甘[○]と[○]三室丸ハ太郎が信[○]義[○]を[○]察
 感[○]ト[○]漫[○]ハ[○]涙[○]を[○]さ[○]す[○]と[○]い[○]ふ[○]日[○]父[○]の[○]頭[○]時[○]も[○]あ[○]ら[○]ま[○]ら[○]と[○]甘[○]と[○]言[○]は[○]す

頭あたま然しか不ずや。ささままななれれがが頭あたま時ときもも。そのその美うつく不ず強つよきをを感え儼げんのの人ひと老おはら
 未なほ評ひら後ごありて。太た郎らうがが罪つみをを省あやまらむむことこと惜あしまむむ弱じやく官くわんをを
 ささままななれれがが詮せん方かたななくく。此この学まな校がうをを退ひくく。故ゆゑ之を帰かへりり

柱石傳初輯卷第二終

乃
孫
十
一



